

まえがき

バラク・フセイン・オバマのアメリカ大統領就任は、アメリカのみならず、日本、そして世界中の人びとに、何か大きな変革が起こる、新しい時代がやってくるという確かな手ごたえ、希望、期待、そして感動を与える歴史的な瞬間であった。その熱気は遠く海を隔てた日本で生活する私たちにも確実に伝わってきた。

テレビで放映されるオバマの演説には、日本人の多くが釘づけになった。オバマの「生声」CDつきの演説集も、40万部以上売れたという（私たちの多くはふだん、特に英語に親しんでいないにもかかわらず）。一体私たちは、オバマのどこに惹かれ、感動し、共感したのであるうか。そこにはきつと、さまざまな人種、文化、歴史、社会システムに共通した、何かしら普遍的なものがあるに違いない。そう、まさに、根源的な「人を動かす」言語感覚が――。

そもそも大統領選挙戦当初、オバマは上院議員一期目の、これといった実績、経験のない泡沫候補に過ぎなかった。それが、見る見るうちに本命視されていたヒラリー・クリントン上院議員などの対立候補を破り、民主党候補に指名される。そして大統領選本選では、経験、実績の豊富な共和党ジョン・マケイン候補を破り、ついにアメリカ史上初の黒人大統領になったのである。オバマ勝利の背景には、長引く不況、ふたつの戦争、崩壊した医療と教育、そして金融危機に苦しむ国民が、ワシントン内部に深くすみつく旧来型の候補ではなく、新鮮さ、若さを売り物にするオバマに惹かれたということも、もちろんあるだろう。

しかし、人びとに「オバマなら、今までのリーダーに期待してかなえられなかった変革 (change) を実現してくれる」と確信させたもの、それはもつと本質的なものではないだろうか。もちろん、アメリカ人がオバマを個人的によく知っているわけではない。しかし、人びとは、演説、テレビ討論、そしてインターネットや携帯電話のテキストメッセージなどを通じて、オバマの「ことば」に触れた。その「ことば」から、彼の人びととの「かかわり方」を、感じとったのである。聞き手中心で、聞き手を巻き込み、共感、連帯感を盛り立てるオバマの言語感覚に、人は動かされたのである。そして、オバマが

意図していようといなかりうと、そこには社会言語学的にみても極めて有効な、人を巻き込む手法が隠されているのである。

大統領に就任したオバマは、議会で就任初の施政方針演説（2009年2月24日）を、次のようなことばで始める。

私は今晚、この偉大な議場におられる卓越した紳士淑女のみなさんに向けて演説するために来ただけでなく、ここに私たちを送ってくれたアメリカ国民のみなさんに、直接、率直に話すためにも来たのです。^{*}①

引用文の英語原文は巻末を参照。

自分が話す相手は、今、議場で自分の目の前に着席している国会議員（そして政府関係者、官僚たち）だけではない。テレビを通じて、アメリカ国民全員に話すのだという。それも「直接」、「率直に」である。すべての国民を巻き込むことばだ。「私」には経験、能力がある、「私」は逃げないで頑張る、「私」がリードする、と一人で叫んでいるのではない。あくまでも聞き手のほうを向き、仲間として、「ともにアメリカを建て直そう」

と熱く呼びかけることばなのだ。

本書ではオバマの巻き込みの手法を、具体的な演説、発言をもとにして分析してみることでしょう。オバマにあって、対立候補のメイケンたちになかったもの、あるいは足りなかったものは何か。ことばが人びとに与える影響力、ことばの重要性をわかっていない日本のリーダーたちは、オバマに何を学ぶべきなのか。

ことばで人を巻き込み、動かす力は、リーダーシップそのものであり、その本質は普遍的で、言語の壁や国境を超えるものである。またその力は、アメリカ大統領や日本の首相など、一国を率いるリーダーだけでなく、さまざまな組織（会社、職場、学校）などで活躍するリーダーにとっても必要不可欠な資質であるといえるだろう。

社会が大きく揺れ動く今の時代に求められるリーダー像とはいかなるものか。本書では、ことばを人と人とのかわり、ダイナミズムという観点からとらえ、リーダーシップの発現としてのことばを考察してゆく。

本書の構成は、おおよそ次のようになっている。

第一章では主に、オバマの大統領就任演説をとりあげる。ここでは、オバマ大統領の

デイスコース（話法、話し方）の基本的な特徴、メッセージ性について考える。オバマの演説の特徴を理解するためには、彼と違ったタイプの演説と比較してみるのが、最も手取り早い。そこで、日本の麻生太郎首相の所信表明演説とどこが違うのかをみていく。そして、その比較から浮かび上がってくるオバマのことばの特徴を、最近のリーダーシップ理論をもとにしながら分析してみよう。

第二章では、オバマの演説のなかから、私がベストだと考える演説をとりあげることにする。オバマの注目度を一気に高めた民主党大会での基調演説、ヒラリーと党指名を争った予備選遊説中の演説、テレビ討論、勝利演説、大統領就任演説、施政方針演説——。日本のみなさんにもよく知られ、紹介されている名演説は数あれど、私の考えでは、オバマの演説ナンバーワンは、選挙期間中に巻き起こったスキャンダルに対する釈明会見で行われた演説、通称「人種演説」だ。「もっと完璧な連邦」(A More Perfect Union)と題されたその演説の、何がそんなに凄いのか。ひとこと言くと、危機をチャンスに変えた演説なのだ。

好意的な聴衆を前にして、自分の得意な分野についての話を理解してもらおうのは、ある程度の能力があれば誰にでもできるものだ。しかし、リーダーとしての真価が問われ

るのは、危機に直面した時だ。自分が明らかに不利な状況で、いかに人を惹きつけ、説得し、味方に引き込むことができるか。その極めて難しい局面を、ことばの力で切り抜け、成功を取めたのが、この「人種演説」だったといえる。まさに、コペルニクスの転換を成し遂げた演説なのだ。ここでは「フレーム理論」という言語学の考え方をもとに、いかにオバマが聞き手の視点や世界観をスイッチすることに成功したかをくわしくみていこう。

第三章では、相手との即興的なやりとり、話し手の素顔がうかがえる大統領テレビ討論（オバマ対マケイン）やテレビ番組のインタビューなどを分析する。あらかじめ用意された原稿をもとに、話し手から聞き手に向かって一方的に行う演説は、いわば準備されたことばだ。言い換えれば、「人工的」に作り出されたことばだともいえる。それに對して、スピーチライターもいない、プロンプター（原稿表示装置）もない、いわば生のオバマのことばとは、どのようなものなのだろうか。相手との対話のなかで出てくることば、予期せぬ質問に答えることばにこそ、話し手の言語感覚、そしてその源泉となる人間性が忠実に表れるのではないだろうか。自然に口から出てくることば、さらにいえば無意識のうちの振る舞いに、視聴者は何を感じとったのであろうか。

第四章では、大統領就任後、最初に行った「施政方針演説」(Address to Congress)を中心にとりあげることにする。そこでは、中央政界への鮮烈なデビューを果たした2004年民主党大会の基調演説から通底する、オバマのディスコースの特徴を再点検する。そして、オバマのことばに象徴される21世紀のコミュニケーション・スタイルとは何か、それは私たち日本人・日本語の文化とどのような共通点と相違点があるのかを探っていく。日本のリーダーたちに求められる、ことばの変革とは何かについても言及することになるだろう。

ことばは、単に表面的なメッセージを表しているだけではない。むしろ、もっと深いところのことばは、その人が誰であるか、どういう視点、価値観を持ち、どこへ行こうとしているのかを表している。

本書は、「ことば」を基点にしてオバマ像に迫り、ことばが人を動かし、政治を動かすという仮説を、社会言語学の観点から検証する試みである。そもそも、社会言語学とは、従来の伝統的な言語学(文法、音韻などといった、ことばそのものの内的、静的な研究)とは異なり、ことばの働きを人間関係、社会とのかかわりのなかでとらえようとする学問分野だ。ことばとは、ダイナミック(動的)なものであり、人間関係の交渉の道具で

あるととらえる社会言語学。「どうしてオバマのことは人を惹きつけ、動かしたのか」。この質問に答えるには、うってつけの学問分野だといえるだろう。

経済が、社会が、そして国が大きな音を立てて変貌していく時代、リーダーシップの象徴となったオバマ大統領の語ることは。ここにこそ、私たちが現代を生き抜くためのヒントが隠されているに違いない。なお、本文中では敬称を省略させていただいたので、ご了解願いたい。